

---

# 魔法戦記リリカルなのは Sword

剣聖

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法戦記リリカルなのは S w o r d

### 【Nコード】

N 1 4 8 1 M

### 【作者名】

剣聖

### 【あらすじ】

何処にでも居る普通の少年、隆矢は「死んだ」。

彼の人生はそこで終わったはずだったのだが、彼は生きた。

転生。それが、彼が生きた理由。

新たなその世界にて、彼は何を思い、何の、誰のためにその力を振るうのか。

仲間、敵、家族。あらゆる様々な人間の考えと答えの中で、彼は進み続ける。

この嘘から始まった現実の世界で得た、彼の答えの一つだから。

『魔法戦記リリカルなのは S w o r d』始まります。

注意！このお話しはユーノなどのリリカルキャラが余り出て来ません。オリキャラと、あのシリーズからのキャラが主体となります。

## ブログ（前書き）

とあるサイトにて投稿している物に、少し修正を加えた物です。  
では。

ブ  
ロ  
ー  
グ

ブ  
ロ  
ー  
グ

毎日の平穏な日常。

ただただ、過ごすだけの日々。

そして俺にとっては現実では無いこの世界。

いつからだろう？

悪くないと思い始めたのは。

全てをオレンジ色に染め上げる夕暮れの中、彼、とみおかりゅうや富岡隆矢は一人歩

いていた。

普段は共に帰る幼馴染が居るのだが、生徒会の仕事やらで居ない。

町のアスファルトを踏みしめながら、学生カバンを揺らす。

太陽が眩しく、建物の影になるべく入るよう歩いていた。

「家に帰ったら何するかなあ……ゲームでもするか？」

いやいやソレとも筋トレでも……と、唸りながら悩むその姿は青春真っ盛りの高校一年生に相応しい。

結局、

「アニメ見よう」

ということになった。

やることが決まったら後は早い。

ちよっとだけスピードを上げて、彼は家への帰路につく。

何事もない、平穏なただの日常。

だが、その平穏はたやすく壊れる物だということを彼は今日始めて

知ることになる。

「キヤアアアアッ！」

甲高い女性の悲鳴が隆矢の耳を貫いた。  
咄嗟に振り返ると三十メートル先の銀行店の前で人だかりが出来ており、一人の女性が黒づくめの男にナイフを突きつけられていた。女性を羽交い締めにする男の鼻息は荒く、体は震えている。

「……はっ？」

「日常」じゃああり得ない、「非日常」な出来事に隆矢の思考は一瞬停止する。

その間にも時は進み、男は大声で叫んでいた。

「は、早く出せ！出さねえとこいつを殺すぞ！」

ナイフを突きつけられた女性はもはや悲鳴を上げる余裕すら無くなったのか、涙目で震えながら自分の首に突き刺さるとばかりに光る銀色のナイフを見る。

そのナイフは確かに人を殺すために充分な力があると告げていた。



しばらくその光景をまのあたりにしていた隆矢だが、我に帰り自分の手が震えているのを自覚しながらも携帯を取り出した。路地裏の喧嘩で一對一なら負ける気は無い。だが、相手に武器があるのだ。しかもバットなどではない、切り裂いて殺すための武器が。

つまり、自分にあの人は助けられないと。

「だ、誰か助けて……」

だけど。

警察に少し離れたところから通報した隆矢は、その声は何故か聞こえた。

それを聞いたら、何故か体の震えが止まる。

「……そう、だな。うじうじしてるなんて、俺らしくもない」

脳内がクリアになり、相手の状態をよく見つめる。

相手はどうやら精神的に追い詰められており、辺りを細かく気にしている。隆矢が警察に通報するのを見られなかったのは、ひとえに人だかりが出来てるからに過ぎない。

「……でも」

一つ、隆矢は気がついた。

そして――

「クソ！」

男は焦っていた。理由は簡単、逃げられないからだ。  
アタッシュケースに金をありったけ詰め込んだ後には銀行の周りはずっかり人だかりが出来ていた。

「さっさと退け！」

だが男のチラつかせるナイフの力は凄まじく、周りの人だかりも薄れて行く。

これで逃げれると思った瞬間――

ダンッ！

大きな着地音が響いた。

辺りがシンツとなり、男は音の聞こえた後ろを振り返る。そこには自分に向かって拳を振るう少年、隆矢が居た。

「ラアアアアアッ！！」

はっ？と疑問に思うまでもなく、拳が顔面を捉える。その一撃で男はよろめくが、ナイフは手放さない。だが、

「フッ！」

次の一撃を同じ場所に貰い、今度こそナイフを落とす。男の思考は混乱の極みだった。

（なんでコイツはどこからー！ー！）

脳みそが揺れながらも、男は上にある物を捉えた。

銀行とは反対側に立つビル。そして開け放たれた三階の窓。

そう、隆矢が気がついたことは男が上を見ていないこと。

そして上からなら人だかりを気にせずに飛び込める。

三階ぐらいからなら、足から着地できれば人間は死なない。

「グッ……ウガアアアアッ!!」

ナイフという自分の唯一の武器を失った男は、人だかりをかき分け、何処に消えた。

すぐにパトカーのサイレンも聞こえ始める。

「ふう……」

ホッ、としながら彼は息を吐く。

まだ終わってなどいなかったのに。

キュキュ！といやな効果音が聞こえ、男が去った方から悲鳴が上がる。

ハッとなつて隆矢を見ると、何かが近付いてくる。

人だかりがサツ！と分かれ、飛び出して来たのは一台のトラック。操縦席に座る男の目は狂気に染まって血走っていた。

「おいおい！」

巫山戯た行為にツツコミながらも体は回避しようと動くが、へたり込んだままの女性……いや、少女に気がついた。

一瞬、ほんの一瞬、隆矢の動きが止まった。

自分だけ避けるのは簡単だ。だが少女を抱えて走って避けられるか？否、不可能だ。

だから、隆矢は、

屈んで少女を掴み、思いっきり放り投げた。

少女は宙を舞い、アスファルトの地面に滑り込む。  
ギリギリ、トラックの走行範囲から抜け出ている。  
だが隆矢が動けたのはそこまで。

トラックの銀色の体が、目の前にあった。  
今更死への恐怖を思い出したのか、体が少し震える。

それに隆矢は苦笑して――

ドンッ！と、トラックに跳ね飛ばされた。  
耳に自分の骨が折れる生々しい音が響き、体中の内臓が潰れる。  
そして十メートル程血の後を地面に垂らしながら吹き飛び、地面に  
転がり込んだ。

やがて転がるのも止まり、地面に仰向けになる。  
トラックは止まったのか、走行する音は聞こえなかった。  
耳に入るのは、人々の悲鳴と、パトカーのサイレンと、かけよって  
来る人の足音だけ。

体の痛みはもうさっぱり麻痺して分からず、分かるのは、自分の体  
を照らす夕日の光のみ。

頭の中を様々な思い出が駆け巡った。

それをぼんやりと走馬燈なんだなと思いつつ、彼は夕日を見る。

夕日の光はオレンジで、あたたかった。

（意外と、夕日ってのも悪くないな……）

隆矢は、始めて、夕日が好きになれそうだった。

だがそんな夕日の光も消えて行き、意識が闇に包まれる。

こうして彼、富岡隆矢は死んだ。

そして、目がさめたら第二の人生を歩むことになる。

これが、彼の始まり。  
彼にとっての、物語の始まり。



## プロローグ（後書き）

とあるサイトで投稿しています、剣聖です。

本来このお話しはあるssの繋ぎの話だったのですが、相当広大になりました（汗

これからも、よろしくお願いします。

PSあのシリーズのキャラはまだ先です。

第一話 彼が掴み取ったもの

第一話 彼が掴み取ったもの

もう、落ち葉が舞い落ちる季節になった。

そんなことを考えるのは何処その詩人では無く、一人の少年である。年は十四歳。中学校の制服を、身に纏った黒髪黒目の少年。

彼は縁側にゴロンと横になりながら、秋の訪れを五感で感じ取る。

ふと、視界が急に暗くなり、影がさした。

それは誰かの影。

そしてその影の主たる少女に、彼は苦笑しながら言う。

「パンツ見えるぞなのは」

「見えないよ！抑えてるもん！」

彼の名は高町隆矢。

剣術が得意な極々普通の人間、では無く。

一般的に「転生者」と呼ばれる存在だった。

彼が二度目の生を受けてから約十四年。

生まれた頃は散々だった。

生まれて感じたのは混乱。状況整理なんて出来る訳が無かった。

知らない家族に知らない場所。

分からないことだらけで、彼が自分を赤ん坊だと理解したのはそれから半年後のこと。

人間は馴れる生き物だ。

その種としての力のおかげで、彼は「ちょっと奇怪な赤ん坊」として育つことが出来た。

状況を考えれば考えるほど、一時創作などでよくある「転生」としか考えられない。

しかも、しかもだ。

新たな両親の苗字が、高町。

その他の情報を統計すると、生前よく見ていたアニメの世界だと分かった。分かって、しまった。

それを理解した瞬間、隆矢には世界が歪んで見えた。家族とも満足に接することが出来ず、全てが偽物に見え、全てが嘘に感じられた。

……アニメの世界？巫山戯るな。普通の現実を返せ！

そんなことを信じてもしいなかった神に恨むようになってから五年がたち、家族に連れられてやって来たのは病院。

その一室で母親、高町桃子が抱えている物を見た。

それは一人の赤ん坊。世の中に当たり前に存在する、一人の赤ん坊。

それを見た瞬間、何故か彼の思考は停止した。

そして気がつくと、兄からその赤ん坊を手渡されていた。

手に五歳児の筋力には少しばかり重い感触が乗しかかり、白い布越しに温かい体温が感じられた。

それは、生きているという「現実」をちゃんと証明しており、隆矢の頭に衝撃を与えたのだった。

それからの隆矢は変わった。

前世の家族に別れを告げ、今世を生き抜くことを決め、動き始めた。木刀を振り、なのはが一人ぼっちのさいでいるだけ側にいてあげ、家族の中心となって動き、そして。

彼はまだまだ先に起こる「未来」の出来事についてどうしようか考えながら、縁側から起き上がる。

「どうしたもんかねえ……」

「へっ？何が？」

「なんでもねえよ」

ポン、と頭に手を置いて撫でてやる。

なのはは頭を撫でられるのが好きで、よく隆矢は「猫みたいだな」とからかいなのはは必至で反論するのだが、

「ふにやあああ……」

この鳴き声を聞くと説得力皆無なのがよく分かる。そんな気の抜けた表情で気の抜けた声を出す妹に苦笑して、隆矢は

よつこらしよと、立ち上がった。

「メシだろ？今日はなんだ？」

「はっ！？危ない危ない……え、えつとね！今日はオムライスなんだよ！だから早く食べよう！」

「はいはい分かりました、お姫様」

幼少期のせいか、なのは隆矢に対しては本当に遠慮が無い。まあ隆矢としても別に八歳児の願いくらい、いいのであるが。

「……」

ふと、オレンジ色の光が目に入って隆矢は足を止める。

外を改めて眺めてみると、そこにあったのは夕陽。

真っ赤な、オレンジ色の夕陽。

昔から、この太陽を見るたびに死んだ時のことを思い出す。

あの時の暖かさや光の強さは昨日のことにように、繊細に覚えていた。

そうやって昔を振り返っていると、服を引っ張られる感触を感じた。現実を意識を戻し、見てみるとそこには膨れっ面のなのは。その表情を見て苦笑し、隆矢は食卓へと向かったのだった。

十月七日の出来事である。

学校というものは大体終わる時間が決まっているもの。  
つまり自然と学生の姿が目立つようになる時間帯がある訳で。

そんな学生達が目立つ夕方、学校指定の鞆を引っさげて隆矢は歩いていた。

「……だりい」

帰り道、というのはそれなりに疲れる物だ。



学校での勉強で疲れた体を動かすのはそれなりに力が必要だし、  
隆矢がもう一つ疲れている理由は、

「何で夕日が見えねえんだよ……」

お気に入りの夕日が完璧に見えないからだ。  
理由は簡単。黒い雲が空を完璧に覆ってしまっているから。  
今にも雨が振り出しそうである。

「……さっさと帰るか、うん。それがいいな」

やることが決まったら後は早い。  
ちよっとだけスピードを上げて、彼は家への帰路につ――

「んっ？」

――こうとしてふと頭を掠める。

（前にもこんな感じで、確か――）

たたらを踏んだ瞬間、

世界が変わった。

「ッ!？」

隆矢はその世界の異変に一瞬で気がつく。

いや、普通は誰でも気がつく。何故なら辺りにいた学生達や通行人が一人残らず消えたのだから。

風景に存在する様々な物質の色も変わり、空の色さえ光が捻じ曲がったような異様な光に照らされている。

間違いなく、異常。

「なん、だよ……これ」

呆然として思わず口から漏れる声。  
遠くまでよく見てみるが、隆矢の視力で捉えられる距離全てがこの異変に染まっていた。

「まさか……」

この異変に、隆矢は一つだけ心当たりがある。

だがそれは、この世界を前世と変わらない「普通の世界」だと思っていた隆矢が簡単には受け入れられないことだった。

魔法。隆矢の心当たりはそれだ。

そしてそれは事実である。

「エリアルシュート！」

「！」

突然の掛け声と空気を切り裂く音に、隆矢は鞆を捨て地面を転がる。  
この世界で学んだことの一つ。

それのおかげで隆矢は、襲って来た空色の弾丸をかわすことが出来た。

敵に当たらなかった光弾はアスファルトに着弾し、轟音を立てる。

「くっ！」

その衝撃による爆風を身に受けつつ、隆矢は道路に転がりこんだ。車はあるが運転する人間は居ないのだから、いつかのように轢かれる心配は無い。

「上からか！？」

「チツ、今のを躲すか……」

上を見ると宙に浮き、忌々しそうに舌打ちをする同い年くらいの少年が居た。

髪はオレンジ。目もオレンジだ。

そんな少年はそれなりの顔を不機嫌さで歪め、手に持つ何かの先端を地上の隆矢に定める。

それは機械仕掛けの、魔法の杖。

直感でヤバイと感じた隆矢は地面を蹴って飛ぶ。

「ブレイカー！」

杖の先端に光が集い、爆発したような轟音を立てて放出された。その空色の砲撃を見向きもせず、駆け抜け、ビルの間へと入る。

「逃がすか！ここでお前は確実に殺す！」

そう叫び声がしたかと思うと、後ろから先程も聞いた空気を切り裂く音が。

「なんだよクソッ！」

隆矢は体を反らし、掠りながらもなんとか躲す。掠った箇所からは血が流れていた。

（非殺傷設定とかいう便利なものはどーした！？野郎、本気で殺しに……！）

その理由を考える間もなく、第二陣がやって来た。それは、空色の刃の雨。

「下手な鉄砲数打ちや当たる、かよ！」

上から降り注いで来るその死の雨を見て、隆矢はそう叫んだ。

空中で加速した刃は、出鱈目に降り注ぐ。

だが路地裏という狭い空間を疾走する隆矢にとっては、点ではなく面の攻撃に近い。

だが隆矢は構わず駆け抜ける。

己の勘と力を信じて。

「ハア……ハア……さすがに、二回死ぬのはお断りだ……」

隆矢はビルの壁に寄りかかってそう呟く。

その身に纏う学生服はボロボロ。

だが致命傷は受けなかったのか、擦り傷程度の血しか流れていない。

「しかし、どうする？これ、結界とかいうのだろ……？」

空を見上げると四角に切り取られた空の風景が見える。  
気味の悪い色を放つ空。

隆矢は考える。

自分は魔法が使えない。いや、魔力はあるのかも知れないが、それを使う方法がさっぱり分からない。

「銃に無手で戦うようなもんだしなあ……しかもバリア付きの。戦車か」

戦車。言い得ている。

戦車相手にどうやって武器も無しに一人で戦えというのか。

「あー！俺に御神の才能があれば……んっ？」

頭を抱えて自分の才能の無さに嘆いていた所で、ふと何か光るものが視界に入った。

隆矢は釣られるように立ち上がり、それを拾ってみる。

「……ペンダント？」

それは剣の形のペンダント。

黒い紐で括られているそれは、どこことなく不思議な印象がある。  
柄の部分には黒いダイヤみたいな物が付いていた。

「誰かの落とし物か？」

そんな暢気なことを考えたら、

目の前に突然、空色の球体が現れた。

「なっ!？」

当時隆矢は知らなかったが、その男は転送攻撃が出来る術者だった。  
そしてその球体は、一撃で隆矢を殺すことが出来る攻撃。

(しまっ)

そして硬直して動けない隆矢に魔力弾は迫り――



『Auto? Protection』

突然現れた半透明の黒い壁に弾かれた。

「……はっ？」

死の危険から突然解放された隆矢は間抜けな声を上げ、手元のペンドントを見る。

チカチカと、黒いダイヤの部分が光っていた。

『防衛術式発動確認。自動で「ソードソウル」、起動します』

「起動？おい、まさかこれー」

『Set Up』

隆矢は最後まで言い切ることなく、渦巻く黒い光に全身を包み込まれた。

彼は現実の認識を手に入れ、世界に生きる。  
そして今、魔導の道へと足を踏み入れた。

## 第一話 彼が掴み取ったもの（後書き）

早いですが、第一話投稿しました。

隆矢の設定としては頼れる思い切りのいい（バカとも言つ）兄貴、です。

では。

PS 実はちよこっとなぜ修正しながら載せてたり……

## 第二話 魔導士？俺が？

第二話 魔導士？俺が？

光が収まった後、そこに居たのは姿を変えた隆矢。  
その身は黒い黒いコートを羽織り、中は銀色の防具や装飾が為され  
た若者のような服。

「おいおい……ご都合主義にも程があるだろ……」

苦笑しながら、隆矢は呆れる。

これは、正しくデバイス。

手に持つ機械仕掛けの太刀を通して伝わって来る。

「これが、魔力か！」

体が、軽い。

手に持つ一本の太刀を軽く振ってみると、空気を切り裂く音。感覚は真剣と同じ。だが、恐らく、

「……いける！」

この力があれば――

「デバイスだと!？」

サーチャーから映し出される画像を見て、少年は叫んだ。  
その半透明の画像には、隆矢がバリアジャケットを身に纏ったまま  
走り出す映像がリアルタイムで映っている。

「チッ！」

少年は舌打ち。だがその舌打ちには殺すのに失敗したという苛立ち  
だけでは無く、「主人公」という立場への妬みも含まれていた。

「デバイスを偶然手に入れただけの素人が……！」

ギリッ！と歯を食いしばり、彼はビルの屋上から飛んだ。

「来たか！」

キイイイン！という空気を切り裂いてやって来る音を聞いて、隆  
矢は立ち止まる。  
道路の真ん中で太刀を構え、上空を見上げる。

「セイバーレイン！」

敵の姿を捉えた瞬間、空色の刃が向かって来た。  
その百をゆうに超える刃を見る。

「……」

冷静にただ冷静に見続ける。  
そして、後十メートルといった所で、

「ふっ！」

息を一息吐いて、動いた。

刃どうしの隙間は小さく、人が一人通れるか通れないかといった所。  
だが、隆矢はその隙間を利用し、躲す。

「ふっ！」

太刀で弾く、

「ラァッ！」

足を動かす、

「ッ！」

体を重心をズラさずに反らす、

「くっ！」

空いている左手で横合いから弾く、

「っ！うおおおおおっ！！」

己の全てを利用して隆矢は、

「っ！！しゃあっ！」

死の雨をかわし終えた。

辺りのアスファルトはボロボロのボロボロ。

大地には至る所に空色の刃が突き刺さっており、ゆっくりと空気に



溶けるように消えてゆく。

それを見ずに、隆矢は異色の空を見上げ、

「あそこか……！」

敵を見た。

先程の逃走中、今の魔法の後、敵は攻撃して来なかった。  
つまり、何らかの理由で今は攻撃出来ない。

此方を啞然として見ている少年を見て隆矢は確信した。

（でもどうする？俺は空なんか飛べないぞ？）

魔力を使って身体能力を強化するのは感覚で分かったが、魔法を發動する方法がさっぱり分からない。

先程からデバイスがうんともすんとも言わないことから、多分これはレイジングハートのような自動で魔法を使ってくれるタイプでは無いのだろう。

「……………あっ！」

隆矢はふと、妙案が閃いた。

「バカな……！あれを躲すのか！？」

少年は空中であり得ない物を見たような顔をした。  
だが彼が幾ら否定しようと、彼の最高レベル殲滅魔法がかわされた  
事実にかわりは無い。

「いくら追尾機能が無いとはいえ、デバイスがあるとはいえ、死ぬ  
のが怖く無いのか！？」

一度死んだ少年は、そう叫ぶ。  
彼は知らない。隆矢は死ぬのが怖い訳では無い。

死ぬのが怖いからこそ、立ち向かうのだ。

そんなことをこの世界を「現実」と思っていない少年が理解できる  
訳が無く、そうこうしている間に、

「っ！？何だ！今度は一体何を……！！？」

巨大な魔力のうねりを感じ、少年は二十メートル先の隆矢を慌てて見る。

隆矢は太刀を腰ために構え、魔力を収束させてゆく。

「あ、ああああ……！」

その膨大な魔力と、隆矢の覚悟を決めた「戦いの目」に射抜かれて、彼は逃げることに決めた。

「は、早く！早く動け！」

『残り十二秒』

先程のセイバーレインは、彼が放てる最高の殲滅魔法。だが、その威力と魔力ゆえに、彼のデバイスは一定時間停止してしまふ。

負荷によるオーバーヒート。

魔力に物を言わせてちゃんと訓練を積まなかった彼の末路がこれだ。

「う」

そして、

「うわああああああっ!？」

隆矢の手から放たれた黒い何かが、少年を撃墜した。

ドオオオオンツ!と自分の攻撃が爆発したことに、隆矢は冷や汗を垂らしながら呟く。

「えっ?爆発した?魔力込めただけなのに?」

彼がおこなったのは、魔力を大量にこめた太刀をぶん投げた、ただそれだけ。

しかし実は魔力を込めるだけで無く収束したため、衝撃とともに弾けて爆発したのだ。

そんなことを知らない隆矢は慌てて墜落した少年の元へと走る。近くに太刀が落ちて有ったので拾って見るが、どうやら壊れてないようだ。

「あぶねえ。弁償とかする羽目になったらどうしようかと……こいつも無事みたいだな」

チラッと倒れている少年を見て、隆矢は生きていることを確認した。  
死んでいたくらいなら正当防衛とはいえ、後味が悪過ぎる。

「……………？あれ？」

ふと、隆矢は辺りを見渡し、疑問に思った。

「なんで結界が壊れてないんだ？」

そう、結界が壊れていないのだ。

知識はうる覚えだが、術者を倒せば脱出できるのでは無かったのか？

「一体……………どういう事だ？」

そう、隆矢がポツリと呟いた瞬間。

「自分が結界の維持を強引に引き継いだんですよ」

「っ!？」

突然の第三者の声。

それを聞いて隆矢は咄嗟に後ろを向く。

そこにいたのは一人の少年。

年は十歳程度だろうか？青の髪に、緑色の瞳。隆矢のような固めのコートでは無く、柔らかそうなコートを身に纏った彼は、まるで魔法使いのよう。

いや、魔法使いなのだろう。

その手には、銀色の弓。

「……お前は」

「貴方が今持っているデバイスの開発者です」

その言葉を聞いて、思わず隆矢は物言わぬ魔導の刀を見る。

「何処かで落としてしまったんですが、まさか貴方に渡るとは……」

「お前は俺の事を知っているのか!？」

「ええ、よく知ってます」

その言葉に、隆矢は刀を強く握り締める。  
だが、

「例えばカレーを食べる時にかき混ぜて食べることとか」

「別にいいだろうがあああああつ!?! かき混ぜなきゃ味が均等  
にならねえだろ!？」

何か、シリアスな雰囲気がいきなりぶち壊された。

高めていた魔力をツツコミのせいで霧散させ、ゼエゼエと隆矢は荒  
く息を吐く。

「く…… 本当にお前なんなんだよ？」

「そうですね。自己紹介をしましょうか」

そう言って、彼はその無表情に近い顔に、少し笑みを浮かべて言っ  
た。

「始めまして。ミッドチルダ出身の転生者兼、アリサ達の友人であるハル・フォーマスです」

「転、生者……だと？」

隆矢は驚愕の表情を浮かべる。

自分以外に、転生者が居るなど考えた事が無かったからだ。そんな驚愕の表情を見て、ハルは、

「以後、よろしく願います」

妹の友人としての挨拶を述べた。



彼は出会う。

この物語を共にゆく事になる仲間と。

## 第二話 魔導士？俺が？（後書き）

新たなオリキャラ、ハルの登場です。

一応、オリキャラ一人一人にエピソードがあるので楽しみにして貰えと嬉しいです。

第三話 置かれた状況。そして……

第三話 置かれた状況。そして……

「お邪魔しまーす……」

「早く来て下さい。時間が時間ですし」

隆矢は急かされつつ、靴を脱いで上がる。

板張りの床が隆矢の体重を受けてギシギシと鳴った。

外は夜。今隆矢が居るのは古い木造建築の屋敷だった。

日本ならではの木の家が放つ古めかしい雰囲気を感じながら、隆矢はここに来ることになった先程の事を回想していた。

「俺の他にも、転生者が……？」

「例外が自分だけだと思ってました？だとしたらまずその認識を捨てることです」

隆矢の呟きに律儀に答えるハル。

彼の言葉には経験したかのような響きが籠っていた。それを聞いて、チラリと倒れている少年を見る。

「まさか、こいつも……」

「百パーセントそうでしょうね」

そう言った後、ハルは異色の空を見上げ、隆矢に提案した。

「結果もそろそろ限界ですし、自分の家に来てくれませんか？」

「……俺がその提案を断ったら？」

隆矢は太刀を握り締め、警戒しながら返す。

目の前の少年を、隆矢はまだ信用していない。

そんな隆矢の警戒丸出しの態度にハルはハアッ、とため息を吐き、

「自分としては来て欲しいんですが……デバイスの件もありますし、まだ試作品ですから、ソレ」

スツと弓を持っていない方の手を上げ、隆矢が持っているデバイスを指差した。

隆矢は先程のぶん投げ攻撃を思い出し、タラーと冷や汗を流す。

「……えっと」

「先程無茶したようですね。フレームがボロボロですよ、それ」

「……マジか？」

「マジだよ」

素であろうハルの言葉を聞き、隆矢は冷や汗が止まらない。

「と、いう訳で早く整備したいので来てくれませんか？デバイス高いんですし」

「……はい」

隆矢は頷くしか無かった。

「全く……自分の力が大きければ大きいほど自分の武器にかかる負担が大きいことくらい、分かるだろう……」

「いや、あの。面目無いです、はい」

ハルの素での説教を聞き、隆矢は頭を下げる。  
見た目九歳の少年に頭を下げる十四歳とは、中々シユールな光景だった。

「……これでよし」

ハルはそう言っで宙に浮かばせていたモニターを閉じる。  
それと同時に黒いダイヤがついた剣のペンダントが出現。  
ハルの手に収まった。  
どうやらメンテナンスが終了したらしい。

「はい。どうぞ」

「あ、ああ。って、俺が持っでいていいのか？」

自分に向かつて放り投げられ、隆矢はしっかり受け取るが問いかける。

これはハルの物なはずだ。渡していいのだろうか？  
その言葉にため息を吐きながらハルは返す。

「自分が持っでいても意味がありませんよ。そのデバイスはすでに貴方をマスターに認めてしまっでいますから。全く、オートガード機能用のAIが誤作動を起こすとは……」

「?と、とにかく。これ貰っでいいのか？」

後半の言葉の意味がかなり理解不能だったが、とりあえずデバイスを貰っていいのか聞いて見る。

ハルはそんな隆矢に顔を向けてニコツと笑い、一言。

「出世払いな」

「あつ、さいですか」

「で、教えてくれんだろ？組織とやらについて」

隆矢は本題を切り出した。

そう、ハルの家に付くまでの短い間隆矢は聞いたのだ。組織と。

あの自分を襲った人間は組織の下っ端だと。

「まあ簡単に纏めると、二つの団体、ギルドがあるんですよ」



「ギルド？」

「ええ。転生者で構成された」

「っ！？」

その衝撃の言葉に、隆矢はただただ驚く。  
よもや、組織を構成できる程転生者達が居ると思わなかった。

「まあ、自分や貴方のように原作に出た人間に接触した転生者は少ないようですが」

「……で、なんでそれが俺が襲われる理由になるんだ？」

「それは『黒』にとって貴方が危険だと判断されたからですよ」

「黒？」

色の名前を呟き、隆矢は頭を傾げる。

ハルは隆矢の疑問に気がつき、丁寧に説明を始めた。

「黒というのはギルド『ブラック・パーティ黒の団』の略称です。ちなみにもう一つは『ホワイト・パーティ白の団』、通称白と言われていますね」

「黒に白か……まるでチェスだな」

「それぞれ特色がありまして。白は量より質。黒は質より量。そして何より基本が違う」

「基本？」

「ええ……つまり、

原作に関わるか、原作に関わらないか」

「なるほどな。原作に関わろうとする黒にとっちゃ、俺みたいな不確定要素は消し去りたいってか」

「白は穏便ですからね。貴方が異質の存在でも殺そうとは思ってませんよ」

白と黒のことをある程度聞いた隆矢はふむふむと納得。

つまり、白は原作になるべく関わらず、穏便にことをすませようとしていて、黒は原作を変えるべきだに関わるのを選んでおり、過激

だということ。

実際、今まで黒による介入が無かったのは白が邪魔をしていてくれたかららしい。

だがもう一つ知りたいことがあった。

だから、隆矢は尋ねてみた。

「なあ、お前はどっちなんだ？」

まあ、答えは分かっていたが。

「どっちでもない」

素で返って来たのには、少し驚いたそうだ。

「……ふう」

家の自分の部屋で、隆矢は目の前に浮かぶモニターから顔を上げる。魔導士として少しは勉強したら、ということでハルに貰った資料を読んでいたのだ。

恐らく、また戦うことになるからと。

「……魔導士に、白と黒か。全く、面倒な事で」

だけど、まっ、なんとかなるだろ。

そう外を見ながら呟いた隆矢の言葉に、少しだけ首に掛かったソードソウルが反応した気がした。

次の日。

「隆矢、何か有ったのか？」

「んっ？まあ」

朝の食事の時間。

隣に座った恭也から心配されながら、隆矢は箸で漬物を挟む。

「そんな大したことじゃないから気にしないでいいぜ。……おいこ  
らなのは。お前なんだその顔」

ジトーとした視線を向けつつ、隆矢は前の席に座る頬に手を当てて  
驚愕の表情を浮かべた妹に声をかけた。  
その妹たるなのは震える声で、

「お、お兄ちゃんに悩み事……！？」

「我が妹！なんだその空から槍が振ってくる的な表情はぶっ！？」

「食事中に騒ぐな」

ゴンツ！と拳骨が隆矢の頭部に大命中した。

隆矢は結局、恭也の一撃のせいで朝食を半分しか取れなかったそう  
な。

それを見ていつもの事だとスルーする高町家の面々。  
食事中のマナーが壊滅的な高町隆矢だった。

学校終わりの帰り道。

夕暮れの光が照らす中、隆矢は家への帰路についていた。  
オレンジ色に顔を染めながら、隆矢は呟く。

「ああー……夕日の光が暖けえ……このまま日が沈むまで浴びていてえ……」

完璧へにや、となっているが無理も無い。

彼にとつて今や夕日はこの世のどんな物よりも、精神が癒されるものだから。

昨日は曇りで見れなかったというのもあるが。

「あーあ。でもなあ……」

アスファルトの地面を踏み、隆矢は立ち止まる。  
そして、

「そうもいかねえみたいだな。なあ、その奴」

「そうだな。諦めてくれ」

後ろを向いた隆矢の目に映りしは、黒髪黒目の青年。歳は十六程度。背もそれなりに高い。その目は真っ直ぐに、隆矢を見ていた。

「封時結界、展開」

彼がそう呟いた瞬間、世界の風景が変わる。色が変わり、灰色の世界へと。

「ソードソウル！」

『Set Up』

隆矢はソレを見てデバイスに呼びかけ、瞬時にバリアジャケットを纏った。

予想は、していた。

何せハルが言っていたのだ。

下っ端の次は恐らく本気で殺しにくると。

「悪いな。恨みは無いんだが……命令には従わなくちゃならない」

そう言つて青年を薄い青色が包む。

光が消え去ると青年は姿を変えて立っていた。

黒の長袖ジャケットに、黒のジーンズ、黒のブーツ、灰色のシャツ。所々に銀色の獅子飾りがついている。

そして肩にかつぎしは、鋼の刀身に巨大な鋼のリボルバーがついた、奇形の剣。

（なんだ、あの剣……どちらにしろ、雰囲気は只者じゃない）

「……………黒刀召還」

隆矢がそう呟くと、ソードソウルを持っていない方の手に、黒い光の剣が出現する。

昨日の夜に覚えた魔法。隆矢は二刀流なのだ。



こちらの方が闘いやすい。

「じゃあ……行くぞ！」

「ッ……！来い！」

タンツ！と敵は地面を蹴り、隆矢に迫る。

上段から真っ直ぐに振り下ろされたそれを、隆矢は二つの剣をクロスさせてその間にぶつけさせた。

「ぐっ！」

「防ぐか。なら」

その攻撃の重さに足が地面に少しめり込むが、敵は容赦なく追撃。

ガンツ！……と銃声にしては余りにも大きい音が響いた。

「はっ！？」

銃声と同時、自分の手に伝わった膨大な振動に隆矢は声を上げ、後ろによろめく。

その隙を見逃さず、敵は奇形の剣、ガンブレードを横に振り抜いた。

「くっ！」

慌てて隆矢はしゃがみ、そのまま後ろに転がって立ち上がる。  
だが、敵は本当に容赦が無かった。

「トリプルショット、シュート！」

ガンブレードを空で薙ぐと、敵の周りに三つの光弾が出現し、それ  
がかなりの速度で隆矢に迫る。

その直線的に迫るレーザーを隆矢は上に思いっきり飛んで避けるが、

「遅い！」

「なっ！？ぐおっ！」

突然、自分より高く敵が出現し、隆矢は大地に叩き落とされた。

今、隆矢は十メートルは上に飛んでいた、なのに彼はすぐにそれに  
追い付いたのだ。

轟音が響き、アスファルトが砕け、砂埃が舞い上がる。

「があっ……！」

「咄嗟に剣を犠牲にして衝撃を防いだか」

大地を転がりながら隆矢は血を吐き、苦痛の悲鳴を上げる。  
側には、刀身が半ばで折れたデバイスが転がっていた。

（マズ……レベルが、違いすぎる……！）

毎日剣の鍛練をしている隆矢には分かる。  
目の前の男は、余りにも昨日の人間と強さが違うと。

「俺の名前はレオ・レイヴェルト。お前をこれから黒の団に連行する最低最悪の人間だ」

自嘲するように、青年、レオは地面に倒れ伏す隆矢にそう告げる。  
隆矢は地面に指を引っ掛けながら、顔を上げて彼の顔を見た。  
その顔は色んな思いが入り混じった、負の表情に染まっている。

「そんな、顔、する、くらいなら……こん、なこことやってんじゃ、ねえよ……」

「悪いな。そうゆう訳にはいかないんだ」

下から睨みつけながらの声を聞いて、彼、レオは苦笑する。

そしてガンブレードを振り上げた。

「すまない」

「アイヴィーラッシュ！」

「ッ!？」

だが、その奇形の剣が振り下ろされることは無かった。

彼の立っている地面がボコツ、と盛り上がり、何かがレオに絡みつこうと地面から飛び出す。

ソレをレオは後ろにステップを踏んで避ける。

かわした何かは、金色の魔力で構成された魔法のトゲ付きツタ。

見た目からしてそれはレオを捕まえるために放たれた魔法だと分かる。

「たあ  
ああ  
ああ  
あつ！」

「むっ！」

更に追い討ち。

後ろに下がったレオに向かって振り下ろされたのは片刃の大剣。その大剣をレオはしっかりと受け止める。

ガギンツ！と鋼どうしがぶつかる鈍い音が響いた。

「ふっ！」

レオはガンブレードのトリガーを引く。

瞬間、シリンダーが回転し魔力の爆発による銃声が鳴った。

その衝撃で刀身が振動する。

ソレを知っていたのか、大剣を振り下ろした人物は鎧迫り合いを止

め、後ろに地面を蹴って飛び、隆矢のすぐ隣に着地した。

「大丈夫？えっと、高町、隆矢、だっけ？」

その疑問に答えつ隆矢は痛みを堪えて立ち上がる。

「ぐっ……あ、ああ。あんた等は、白か？」

「そうよ。白の団」

隆矢はしっかりと立ち上がって改めて二人を見た。

大剣を振り下ろした人物はオレンジのツインテール、青い瞳の少女。歳は隆矢と同じくらいか。

身の丈以上ある大剣を両手に掴んで構えている。

もう一人、最初の魔法を放ったのも少女。ただし、先程の少女よりは小柄だ。

額にゴーグルを付け、左右非対象のバリアジャケットを着ており、髪は茶色で瞳は少し暗い緑。

そして恐らくデバイスであろう、帯のような物が彼女の周りをふよふよと浮いている。

だが少しばかり様子がおかしい。

レオを睨み付けているのだが、その目は、少し、泣きそうになっていた。

それは小さなものだが、隆矢は分かった。同じような瞳を、何回か見た事があるから。

「アンタ……！」

「リタ……」

その少女の名前であろう。  
レオは、彼女に声を出す。  
だが、彼女は怒鳴り返した。

「黙れ！アンタなんか、アンタなんかあ！！」

「リタ、落ち着きなさい！」

大剣を持つ少女に言葉で止められ、少女、リタは口を噤む。  
それを確認して、彼女は前に向き直る。  
その目は正しく戦士の瞳。

「さて、レオ。色々聞きたいこともあるし、一緒に来てもらおうか？」

「残念ながら、それは無理だ」

その言葉を聞いてレオは悲しそうに苦笑して、

瞬間、彼の足元に白い魔法陣が展開された。  
その魔法陣を見て大剣を持つ少女は叫ぶ。

「転送魔法！」

「じゃあな。次は合わないことを願う」

「逃がすか！」

リタが緑色の帯をひっ掴み、鞭のように振り回した。  
それに反応して彼女の前方に金色の魔法陣が展開され、そこから光  
の龍を模した光線がレオに向かって放たれる。  
空気を切り裂き、それはレオに牙を突き立てた。

ズドオオオオオオンッ！

直撃。

轟音と同時に、アスファルトが更に砕け散り、その下の大地のせいで  
大量の砂埃が舞う。  
視界が遮断され、向こう側が分からなくなった。

「わぶっ！ゲホ、ゲホ……やったのか？」



隆矢はその煙を払いつつ、二人に問いかける。

一人は首を横に振り、もう一人は忌々し気に舌打ち。

砂埃が消えたそこに、レオの姿は無く、ただボロボロの大地だけが存在した。

「助けられたのは二度目だな、ソードソウル……」

結界が解けた街で、隆矢は近くのビルの屋上にてそうデバイスに言う。

手に収まっているデバイスはそれに答えない。  
今は自動修復中だからだ。

「……ワリい」

最後にもう一回謝って、ポケットに仕舞う。  
そして隆矢は後ろを向いた。  
そこでは先程の二人が宙に浮かぶモニターに向かって何か言っている。

「ちょ！本気ですか！？」

『ここまで知られているのだ。なら協力して貰うべきだと思っぞ』

「まあ、アンタが言うならいいんだけどさ……本気？」

『勿論』

何やら論議しているようで、結局、ツインテールの少女が折れたらしい。

彼女はため息を吐いてモニターを閉じた。

そして、再度此方を見てハア、とため息を吐く。

それにすこしばかり隆矢はイラッと来るが、ガマン。

「ほらアスカ。ちゃっちゃんとやるわよ」

「分かってるわよー……ゴホン。えーと」

リタに呼びかけられ、彼女は顔を引き締める。

一度咳払いした彼女は、

「白の団副隊長、アスカ・ウェスperiaです。高町隆矢、貴方を白の団の居城に同行をお願いします」

「副隊長……？」

そう、名乗った。

・ ・ ・ ・ ・ まあ、彼女らしいというところで。

彼は向かう。

二つの色の二つ入と。

### 第三話 置かれた状況。そして……（後書き）

さて、ここまでが既に書いていた物です。

ついにあのシリーズのキャラが登場。

というより、ぶっちゃけオリキャラ作るの疲れたただだったり（汗  
レオも前作ったキャラですし。

あつ、リタとか知らない人はオリキャラ感覚でお願いします。

PSリタとレオに恋愛要素あります。レイリタ好きの人、すみませ  
ん。

## 第四話 白の団の願い

### 第四話 白の団の願い

ヒュウン、と転送魔法独特の効果音が響く。  
その効果音を生で耳に入れ、隆矢は少しばかり感動しながら辺りを見渡す。

周りは白い鉄に覆われており、所々が光っていた。

「ここが私達の本部。第九十管理外世界の地下に存在するのよ」

転送装置から降りながら、アスカは此方にそう言ってくる、

隆矢はそれにへー、と返して転送装置から降りた。

確かに窓が一つもなく、地下だと分かる。

そんな風に立ったまま眺めていた隆矢が邪魔だったのか、リタが何かを振るった。思いつきり。

「ほら、サッサと行くわよ」

「ぐぼっ！」

身長百五十センチぐらいしか無いはずのリタの小柄な体から繰り出された一撃は、鍛えられた隆矢の腰にかなりのダメージを与えた。何故なら、

「おい待て！本で叩くな本で！」

そう、本でぶっ叩いたからだ。

鼻を不機嫌そうに鳴らすリタの右手には、辞典のような分厚い本。

ソレに対しての隆矢の抗議をスルーし、リタは本をもう一度掲げる。そして脅し。

「もう一発いかれたいの？いいからサッサと来なさい」

「……はい」

皆さん、本の角で人を叩くのはやめましょう。  
本も鈍器になります。

隆矢はそんな警告の声を心中で呟いたそう。

転送装置が設置されている地下一階の部屋から出た三人は、白い鋼  
によつて作られた廊下を歩いて行く。

すると、二十メートル程先の角から誰かが出て来た。

「おつ、帰つて来てたのか」

「お帰りなさい、リタ、アスカ。えっと……「隆矢よ」隆矢さん。  
初めまして、私エステリーゼ・ヒュッセラインって言います」

「あつ、どうも。高町隆矢って言います」

その向かい側から来たピンク色の髪と緑色の瞳の女性、黒い髪の男  
性に声をかけられ、隆矢は挨拶されたので、慌てて挨拶し返す。



「ふーん……ヒュッセラインって聞いて驚かないてっことは、やっぱり管理外世界の人間か」

「……？」

意味深気な男性の言葉に、隆矢は首を傾げるが、突然、それを遮るように慌てて女性が話し始めた。

「あつ！えつと、その、気にしないで下さい！それと、私のことはエステルと呼んで貰えるでしょうか？」

「ああ、分かった。さんはいませんか？」

「はい」

「んじゃエステル。よろしく。で、そっちは？」

何だか話を反らそうと頑張っていたので、隆矢は苦笑しながらそれに乗ってやる。

名前を尋ねられた青年は長髪を揺らしながらフツ、と笑い名乗った。

「俺はユーリ・ローウェルだ。お前、隆矢だったか？結構面白そうだな」

「そつか？でもユーリ……さんは？」

「いらねえよ」

「ユーリって強いだろ。かなり」

そう、ユーリを最初に見た隆矢の感想がそれだった。

身のこなしといい、服の隙間から見える筋肉のつき方といい、歴戦の剣士を感じさせる。

へえ、とユーリは感心してからじろじろと隆矢を見ながら楽しそうに、

「お前も得物は剣っばいな。後で模擬戦でもするか？」

「ああ、是非頼む。とある奴にぶっ飛ばされたばっかだしな」

そんなやりとりに、

「オイコラバトルジャンキーども。早く隊長の所に行きたいんだけど？」

アスカがこめかみをひつかせながらそう言うのだが、男二人は会話を夢中で聞いていない。しかも内容は剣の事ばかり。その姿にハア、とアスカはため息を吐く。

「男ってバカばっか……」

「全力で同意するわ……」

「ふふふっ……そういえばリタ」

「んっ？何よエステル？」

呆れて頭を抑えていたリタだが、エステルからの真剣味を帯びた問いかけに、茶色の髪を揺らしながらエステルの方に顔を向け、言葉を待つ。

その視線を受け、恐る恐るといった感じでエステルの口が、言葉を紡いだ。

「レオは、どうでした？」

瞬間、空気が凍った。

リタの表情が固まり、冷たい無の表情に染まる。

だが、その前に悲しそうな顔になった一瞬を、ここにいた四人はハッキリと見た。

リタはエステルから視線をそらし、顔を廊下の先に向ける。

「別に、あんな奴のことなんか知らないわよ……」

「リタ……」

「アスカ、悪いけど私部屋に戻るわ」

そう言い残して、リタはテクテクと歩いて行く。

その小さな小さな背中を悲しそうに見る四人。

だがその内の一人が、

ダンッ！！と壁に右拳を叩き付けた。壁が振動し、僅かだが床も揺れる。

叩き付けたのは、アスカ。

その表情は怒りに染まっていた。

彼女は絞り出すように声を吐き出す。

「アイツ、リタをあんなに悲しませて、何がしたいのよ……！！？」

「落ち着け、アスカ。俺たちがどうこう言ってもしやーねえよ」

「分かってるけど……！！」

ユーリの言葉に、アスカは歯を食いしばる。

そんなアスカに声をかけたユーリも僅かだが、怒りを見せていた。

「……なんか、複雑な事情があるのか？」

「私の口からは、ちょっと……」

「そっか……」

エステルも暗い顔をしており、隆矢も無理に聞こうとはしなかった。  
隆矢は思い出す。  
リタを見た時のレオの顔を。

「あの男は何してんだ……」

あんな、小さな子放ったらかして。

思い出したレオの顔は、リタと同じように悲しみに染まっていた。

「じいよ」

「一番地下にあるのか……」

「そっちの方が“らしい”でしょ」

「違うない」

地下二十五階、最下層。

そのエリアにたった一つだけ存在する部屋の前に、隆矢は立っていた。

扉は茶色で木製のように見えるが、触ると近くの壁に使われている金属と同じだと分かる。

「隊長、高町隆矢を連れて来ました」

『待っていたよ』

アスカの声に反応し、扉の上部についているスピーカーから音声が返ってきた。インターホンのような仕組みになっているらしい。

ガチャ、と扉のロックが外れる音が聞こえ、アスカは扉の出っ張りを掴んで押した。

部屋の中は一言で言うならどこかの社長室のよう。

茶色のカーペットが敷かれた床に、茶色の大きなデスク。

そこに座っていたのは一人の女性。

年は二十代後半か？

銀色の輝かんばかりの髪を持ち、金色の瞳を部屋に入った二人に向ける。

正しく絶世の美女。加えて何処か鋭さを感じさせた。

その一恐らくアスカが隊長と言った人物なのだろうーを見て彼は思わず一言。

「女性、だったのか。てつきり隊長つてくらいだからゴツイ男かと……」

「そちらの方がよかったかい？」

「いや、こっちでいい」

投げかけられた言葉に、隆矢は苦笑する。

確かに驚いたは驚いたが、話をするのに不便さは無い。

その返答を彼女は聞いて「そうか」と返し、ふと、二人を見て足りない人物が居るのに気がついた。

「リタは？」

「部屋に……」

「そうか……やはりリタにはこの任務は不味かったか」

アスカからの報告にふう、と悲しそうにため息を吐いてから、彼女は隆矢に顔を向ける。

表情はにこやかで、そこらへんのモデルよりも遥かに美しい笑顔。

「始めまして。私は白の団の隊長を勤めさせてもらっている、フォース・ラインベルと言う。フォンと呼んでくれ」

「うーんと、一応俺も。高町隆矢。海鳴市に住む中学三年生だ」

恐らく自分の名前は知ってるんだろうと思いつつ、隆矢は自分のことを述べる。

彼女、フォンはふふつ、と小さく笑い、

「長い話になる。コーヒーでも飲むかい？」

「あつ、貰います」

隆矢は即答した。

貰えるものは貰っておけ。

隆矢の好きな言葉の一つである。



「さて、どこから話せばいいのやら……そうだね、取り敢えず現在の現状から語ろうか」

「お願いします。ハルに聞いたとはいえ、まだ分からないことだらけなんで」

「ハル？ハル・フォーマスかい？」

黒色のソファ―に座っていたフォンは驚きからか、身を乗り出してくる。

隣に座っているアスカも、驚きに目を見開いていた。そんな二人の姿を見て隆矢は首を傾げる。

「ハルが何か？」

「いや、君はもう主人公と接触していたのか。……なるほど、君のデバイスは彼に貰ったのかい？」

「えっと、出世払いで」

あはは……と失笑しながら隆矢は言う。  
ちなみにデバイスの値段はとても高い。詳細を言いたくないくらい

に。

ふう、と一息吐いて、彼は今の言動の気になった部分を指摘する。

「主人公って？なのはのことじゃ？」

「いや、その主人公では無い。転生者としての、主人公だ。そこには君も含まれる」

「俺も？」

「アンタ達だけなのよ」

隆矢が自分を指しながら首を傾げ、アスカが隆矢の前にモニターを展開させながら言う。

俺達だけ？と更にクエスチョンマークを浮かべる隆矢に、アスカは説明を続けた。

「海鳴市に存在する転生者はアンタを含めて三人。そしてその三人は既に原作に登場する人間と関わりがある……」

「あー……」

（そういえばハルの奴、アリサ達の友人とか言ってたなあ）

アスカの説明を聞きながら、隆矢は自分の持つ情報と照らし合わせた。

そして、もう一人は知らないけど、と画面を見ながら隆矢は思考する。

そこには自分と、青髪緑目のハル、そして黒髪赤目の十歳くらいの少年が映っていた。

「これまで原作に関わろうとする転生者は居たのだが、私達と戦って負けたか、何か他のことが原因で接触していないんだ」

「へえー……一昨日まで襲われたりしなかったのはそのおかげか」

「そうゆうこと」

アスカが頷く。

どうやら自分の知らない場所で戦いはずっとあっていたようだが。しかし疑問が一つ残る。

だとしたら何故、今まで襲われなかったのに今襲われ始めたのか。

「で、私達の願いは」

アスカが恐らく本題を言うために、息を吸い込み、隆矢も押し黙って彼女の言葉を待つ。

恐らく、今から言う「お願い」に今の疑問も関わっているだろうか。

そしてアスカは言う。

「アンタに、白の団として協力して欲しい」

言われた言葉は、予想通りと言えば予想通りだった。

「……俺に？」

隆矢がまたもや、自分を指差して尋ねる。  
それにゆつくりとフォンは頷き、

「ああ、正直に言って戦力が足りない。向こうは百人。こっちは転生者じゃないのを含めても三十届くかといった所だ」

戦力差を言い切ってから更に、と付け加える。

「この所活動が活発になり始めている。恐らく近いうちに、戦いが始まるだろう。今までとは比較にならない程の戦い。いや、戦争が」

そこまで言ってフォンは隆矢の目を見る。

その瞳には意思が灯っていた。

隆矢は似たような瞳を見た事が何回もある。これは、戦う戦士の瞳。

「協力して貰えないだろうか？」

彼女はそう、何処かの漫画の主人公に言うセリフのように、隆矢に「お願い」をした。

「で？結局どうすんのよ？」

「いや、だからまだ決まっていって」

地下五階。

ここに住む人間が「ホール」と呼ぶこの場所に、アスカと隆矢は居た。

アスカの問いに、隆矢は苦笑しながら答える。

結局。先程、隆矢は「考えさせて下さい」と返答した。

フォンは分かったと答え、しかし早めに返答が欲しいとも言った。どうやら原作が近付いて来たせいか、黒の動きが活発になっているらしい。

ホールのベンチの一つにどかと座りつつ、彼女は隆矢をジー、と見て、自分の考えを述べ始める。

「えー？アンタ絶対悩んだりするタイプじゃないと思うんだけどなあ……敵がいたら倒せばいい！的な」

「いや、いくら俺でもそれは悩むわ！まあ、あれだ。高校のこともあるし……」

「高校？ああ、そんなのもあったわね。久しぶりに聞いたわ」

「いやー懐かしいなー、などと言うアスカを見ながら、隆矢はふと気がつく。

（そっぴや、こいつも転生者、なんだよな……実は中身おばさんだったり

ザシュッ！！

「何か言った？」

「何も言ってねえよ！」

自分の半歩横に突き刺さった大剣を横目に見て、冷や汗を垂らしながら隆矢は必至に叫ぶ。  
確かに内心では大変いけないことを考えていたが、声には出して無かった。

女ってエスパーなのかと隆矢が思い、地面に刺さった大剣をアス力がズボツと引き抜いた頃。

『黒の団』

本部。

「……………なんだ？」

廊下の一つを歩いていたレオは立ち止まり、後ろに問いかける。  
鋼で構成された廊下のほのかな明かりの影による死角、そこに、誰かが居た。

その誰かはフン、と鼻をならし、彼に言葉を発する。

「別に、大したことじゃあない。ただ、惚れた女を捨ててまで寝返った物好きな男を見に來ただけだ」

「そうか」

挑発的な言動にもなんら怒りを見せず、レオは短く返し、再度歩き始めた。

「……………ただの屑じゃないようだな」

そんな後姿を見て、闇に隠れる誰かはそう呟き、レオとは反対側の道に行く。



彼等は迷いながらも進み続ける。  
進むことが、未来への活路になると信じて。

#### 第四話 白の団のお願い（後書き）

若干短いですが……

ここまでが書いた分。次会、リリカルキャラ登場です。

## 第五話 赤目の少年と隆矢の答え

### 第五話 赤目の少年と隆矢の答え

「どうするかなー……なあ、ソードソウル」

『貴方の思う通りに』

ストレージデバイスであるソードソウルだが、簡単な応答なら出来る。

その簡素な返答を聞き、隆矢は空を眺めた。  
空は、青に染まっていた。雲一つない、青へと。

「どうするかなー……」

隆矢は再度、その青い空を眺めながら呟いた。

十月十日、土曜日の朝七時、高町家の屋根の上にて。

彼はあれから考え続けていた。  
自分が取るべき行動を。

「って、いつでも迷うようなことじゃねえんだけどなあ……」

喫茶「翠屋」の厨房にて、隆矢は皿洗いをしながらため息を吐く。  
そう、既に答えは決まっていた。  
自分に力があって、それで周りの人間を、家族を守れるというのな

ら迷うことは無い。

白での活動も楽しそうだし、魔法の力を極めるにはあの申し出は受けるべきだ。

だが、

「どうやって皆に認めさせるか、だな」

そこが問題。

今から隆矢は高校に行くために色々しなければならぬ時期だ。

まあ、転生前は高校一年だったため、経験はあるからそこまで焦る必要は無いのだが……

「……どうしよ」

皿をクルンと器用に指で回して、隆矢は頭を捻り続けた。

「んじゃ、上がるからー」

「あつ、隆矢、ちょっと待て」

「んあつ？」

着ていたエプロンを畳み終え、裏口から店外に出ようとした隆矢は呼び止められドアノブを掴んだ状態で体の動きを止める。

呼び止めたのは士郎。

士郎は隆矢に何か白い箱を手渡した。

「あり？これシュークリーム？」

渡された隆矢は重さの感覚とわずかに匂う甘い匂いで中身を当てる。箱の蓋の僅かな隙間からシュークリームの一部が見える。重さからして五個は入っているだろう。

「ああ。なんでもなのは家にアリサちゃん達を呼んでるらしくてな。持って行ってやってくれ」

「……？アリサとすずかだけなら三つでよくね？」

数が合わないことに疑問を持ち、首を傾げるジェスチャーをする隆矢。

その疑問に、士郎は笑いながら答えた。

「いやな。何でも男友達二人も来るんだと」

「ただいまー」

「あつ、隆矢お兄ちゃんが帰って来た」

「あででで！！ちょ、ギブッ！アリサギブぎゃああああつ！？」

「ギブ？何か欲しいの？いいわよくれてやるわよ関節技をねええええええええ！！！」

「ア、アリサちゃん。レン君も反省していると思うし、そのくらいで……」

「すずか。こいつが反省することなど、絶対あり得ない」

家の玄関に入った瞬間、リビングから聞こえてきた声に隆矢は冷や汗を垂らす。

なのはの声はいい。いいがあの絶叫は？

廊下を歩き終わり、恐る恐るリビングへと通じる扉を開ける。

「……………」

「お邪魔してます」

「えっと、あつ、隆矢さんこんにちわ」

「隆矢久しぶり！！」

「あででででっ！ちょ、挨拶も出来ないからやめあたたたたっ！  
」

「……………なのは、何これ？」

「えっと、アリサちゃんにすずかちゃんにハル君にレン君だよ」

「多分最後に名前呼んだ奴が大変なことになってるのはツッコミ  
入れないのな」

リビングで見たのは、テーブルの上にカップを置き此方に挨拶をして来る青髪の少年と、トテトと立ち上がって駆け寄って来た妹と、

なんか金髪の少女に海老剃り固めを決められた黒髪の少年に、それを止めようとオロオロしながらも丁重に挨拶して来た紫色の髪の少女だった。



「始めまして、だな。俺は高町隆矢。なのはの兄だ。気軽に隆矢と呼んでくれ」

「自分も改めて。ハル・フォーマス。なのはの友人をさせて貰ってます」

「俺の名前は紅宮連あかみやレンです。レンって呼んで下さい」

女子三人が隣でシュークリームをばくつく中、テーブルを挟んで座った三人はそれぞれ挨拶する。ちなみにレンの丁寧な口調に隆矢は少しビックリしてたり。

（……ハルはともかく、こちらのレンってのもなのはの友達だったのか……）

自分から向かって左に座るハルから視線を外し、隆矢は右に座る黒髪の少年を見る。

年はやはりハルと同じくらい、いや同じで、ショートカットの黒髪による前髪の隙間から除く明るい紅い目が特徴的だった。

「でもなのはに男友達が居るとはな」

「実際は直接なのはと友達になった訳じゃないですよ。俺はさすがと、ハルはアリサと友達だった訳で」

「まあ、自分は最初は知り合い程度だったんだがな……」

ハルがそう言うと、カチン！という効果音が聞こえた気がし、

「知り合い程度！？アンタ最初そんな風に思ってたの！？」

「当たり前だろう。まだ知り合って間も無かったというのに、いきなり友人などと考える訳ないだろう」

ガー！と突っかかって来たアリサに、ハルはサラッと答える。  
ちなみにアリサ、ほっぺにクリームが付いているが気が付いていない。

「まあまあ。今は友達なんだし、昔のことはいいじゃないか、なっ。  
なのは？」

「うん、そっだよアリサちゃん！」

うっ、となのはの満面の笑み＋言葉を受け、彼女は呻きながら怒鳴

るのを止める。

確かになのは笑顔には怒りを吹き飛ばす何らかの力があつた。

「ハッハッハッ、やっぱアリサはなのはには弱いなー」

それを見越してなのはに振った張本人はカラカラと笑う。  
ギンッ！と不完全燃焼のアリサが凄まじい眼力でレンを睨むが、彼はそれをすずかの方に顔を向けてスルー。

「レン君、アリサちゃんが口パクで『後で覚えてなさい』って言うてるよ」

「H A H A H A H A ! 気のせいだって……たぶん……」

「自業自得だな。諦めろ」

「庇ってやったのにそれ!？」

訂正。

完璧にスルー出来てなかった。横目でチラチラとアリサの様子を伺っている。

（なんつーか、賑やかなメンバーだなあ……）

そんな五人の様子を、ソファ―に持たれ掛かった隆矢は何処か微笑ましそうに見ていたそう。

時間は立ち、夜。無音の世界。  
そんな世界になっていた部屋に大きなあくびをする少年。

「ふわぁーあ……もうこんな時間か……」

隆矢は壁に掛かったアナログの時計を椅子の背もたれに寄りかかりながら言う。

時計の短い針は十二を通過し、一に半分程近付いていた。

「もう寝るか……皆への言い訳どうしようかねー、本当……」

そして天井に点いた明かりを消そうと椅子から立ち上がり、壁に付いたスイッチに手を伸ばす。  
白いスイッチのプラスチックに指が触れた所で、

カツン、と何か音がした。

「……………？外？」

隆矢は疑問に思いながらもスイッチから手を離し、窓へと向かう。  
パチン、と鍵を外して開け、窓から外を眺めると、電柱の光に照らされて誰かがいた。

「……………レン？」

誰かの正体が分かった隆矢は、ポツリと呟く。  
その呟きが聞こえたのか、彼は頷き、手で弄んでいた石ころをゆつくりと投げ捨てる。

カツカツ、と小さくアスファルトの地面に小石が当たった音が夜の道に響いた。

「……………」

無言のまま彼はクイ、と右手を右に指す。  
そしてそのまま、指した方向へと静かに、音を少しも立てずに歩いて行った。

その背中が見えなくなってから、隆矢は自分の考えの結論を呟いた。

「……来い、ってことか？」

「来てくれたか。来なかったらどうしようかと思った」

レンはホッと一息つき、ベンチから立ち上がる。  
その行為を黙って隆矢は眺めていた。

二人がいるのは深夜の公園。

夜の一時に差し掛かりそうなこの時間には公園などに誰もおらず、

二人だけ。

そんな静かな雰囲気を通ち切るかのように、隆矢は問いかけた。

「どーいづつもりだ？」

「んや。ただちょっと……」

レンの言葉の途中で、隆矢はバリアジャケットを一瞬で展開。  
何故か？それは、

「戦ってほしいかなって！」

「くっ！」

彼が地面を蹴って殴りかかって来たから。

隆矢が咄嗟に目の前に出した刀身にガキン！とぶつかる拳。

「ナツクル……！」

「防ぐか！なら！」

金属のグローブに包まれた右手でレンは刀身を握り締める。  
太刀の刀身を握られて隆矢は咄嗟に左手を太刀から離し、顔の横に構える。

その腕に、紅い羽が付いた足の一撃が来た。

レンは身長之差を物ともせず、空中でケリを放ったのだ。

ドムツ！と鈍い音が隆矢の左腕から響き、その衝撃が腕を通して隆矢の頭まで伝わる。

「……ッ」

「もらった」

グラツと、足を揺らした隆矢の太刀を掴んだまま、彼は空を“蹴る”。

「しまっ」

そしてレンのその空中でのあり得ない加速エネルギーで太刀ごとぶん投げられ、隆矢は公園の森林に砲弾の様に飛び込んだ。

「ーッ！？」



隆矢は木々をへし折りながら吹き飛び、声にならない悲鳴を上げる。  
バキバキ！と轟音を立てながら、木が彼に当たって折れてゆき、

「ーッ！らあっ！」

途中の木に太刀を突き立てて、隆矢は止まった。  
その衝撃で木が揺れ、根っこが地面から盛り上がって傾くが、倒れはしない。

気がつくと、公園は既に結界に覆われていた。

「つう……やってくれんじゃねえか……」

結界が張られているのを肌で感じとりながら、隆矢は自分が飛んで来た道のりを見る。

木々が折れ、その衝撃のせいで大地がえぐれているその道の様な所をレンが静かに歩いて来ていた。

姿は両手両足に金属の武具が付いており、半袖の赤いコート、黒のジーンズのようなズボン、黒いシャツ。

（あれがアイツのバリアジャケットか……どうやら殴り合いが得意っぽいな）

両手両足の光る金属を見て、レンの戦闘タイプを判断し、隆矢は右手に太刀を、左手に魔力刀を出現させ、構える。

「今のをバリアジャケットだけで耐え切るのか……」

「うるさい。まだプロテクションとか使えねーんだよ！」

多少ボロボロになったバリアジャケットを再構成しつつ、隆矢は走り出す。

狙うは、一撃での昏倒。

「ふっ！」

右の太刀はレンの首を。  
左の光剣はレンの腰を。

その真横からそれぞれ振られた攻撃は、

『Bewegungs』

「遅い！」

「ぐっ!?!」

高速機動魔法でいとも簡単にかわされた。しかも後ろからの後頭部への一撃。

レンの足についた紅い羽が煌めいており、手についたナックルが合音をあげる。

「まだまだ！」

「がつ！？」

次は隆矢の顎が殴り飛ばされ、大地から足が離れて隆矢は空へと舞った。

空気の層を突き破り、かなりのスピードで打ち上げられた隆矢は空中でなんとか態勢を立て直そうと、

ガギヤ！

「逃がさない」

「早っ！？」

出来なかった。

昨日の戦闘と同じように上に先に回られ、隆矢は太刀を振るうが逆に掴み取られる。

掴んだレンの左手のナックルから、

『Explosion!』

合成音とともに空薬莢が飛び出した。  
レンが纏う魔力量が、跳ね上がる。

「カートリッジ……!？」

「リエセ」

隆矢の呟きは、

「ファストオオオオオオッ!!」

爆炎を纏った右拳の一撃の前に、呆気なく消え去った。

ドゴオオオオオオオンッ!!

明らかに人間が喰らって無事で済むはずが無い威力の爆発が、隆矢

に直撃。

炎の魔力パンチ、指向性の爆発を至近距離でモロに喰らった隆矢は音速を超えた速度で大地に衝突する。

公園全域の大地が揺れ、まるで隕石が落ちたかのような現象が巻き起こった。

「……終わり、か」

でこぼこの大地に、レンは着地する。

辺り全域を舞い上がった砂煙が覆い隠しているが、レンが腕を思いっきり振るうと竜巻のように衝撃波が砂煙を吹き飛ばす。

地面に出来た巨大なクレーターの中心に、黒い塊がある。

それは人。

バリアジャケットを体全体に包んだのであろう。

地面に這いつくばるように倒れてよく見えないが。

「……やっぱ、アンタじゃ無理だったか」

クレーターの端に立ってそれを見たレンはため息を一つ。  
倒れている隆矢はどう見ても戦闘不能だった。

バリアジャケットを維持しているから、まだ僅かに力があるのかも  
知らないが。

「……さて、後始末に移ろう」

そう誰ともなしに呟き、レンは隆矢に背を向けようとして、

「……？」

ふと、何か違和感を感じ、レンは隆矢をまじまじと見る。

（なんだ？何か違和感が……？）

改めて一つ一つ確認してゆく。

直径十メートル程のクレーター、這いつくばって倒れる隆矢、黒髪、  
地面に食い込んだ指、ダランと力が抜けている両腕、投げ出された  
両足……

（……？）

だだの杞憂かと思い、視線をそらそうとして、

（！？）

レンは気が付いた。

太刀が、無い。

「っ！？」

ソレに気が付いた瞬間、レンは直感に従い一気に体を横に動かす。  
キュン！と何かがレンの居た場所を通過した。

（物質操作魔法！？）

飛んで来た物、太刀型のデバイスを見て使われた魔法が分かった。  
レンはソレに驚愕して隆矢へと向き直る、

「神速」

「!？」

事なく、隆矢を目の前に見た。

レンは隆矢が気絶した振りをしていただけと思っていたが違った。

全ては、最高の一撃を放つための時間稼ぎ。

クレーターの坂を駆け上り、隆矢は太刀を掴んで発動する。

現在放てる、最強の魔法剣技を。

「一閃!!!!」

正しく神速と呼ばれる凄まじい速度、人間のあらゆる限界を超えた速度で隆矢は大地を一気に駆け、すれ違いざまにレンを切り裂いた。

「……マジ、か……」



「マジだよ」

斬られた箇所、非殺傷設定の太刀が切り裂いたバリアジャケットを見ながら言ったレンの言葉に、隆矢は適当に返した。

その返答にレンは震える顔で笑い、

ドッ、と片膝を付いた。

「俺の勝ち、だな」

その姿を視界に納め、隆矢は息を長く長く吐きながら空を見る。

空は彼が好きなオレンジでも無く、爽やかな青でも無く、黒で、黄金の星の輝きに照らされていた。

「で？何で昨日俺を襲った？さあ、キリキリ吐け。キリキリと」

「いやあの。その前にこれ除けてくれませんか？」

「却下」

「ですよー……」

日曜日。

つまり次の日。海鳴にあるとある山の森の中。

そこに張られた小規模の結界の中で隆矢はレンを尋問していた。

ちなみにレンは地面に素足で正座で太ももの上に「百キロ」と刻まれた金属の四角い物体が置かれている。

隆矢がどこから持ってきたのかは不明。

「痛い……」

「此方とら一日待ってやったんだ。これくらいで済むなら安いもんだろ。さあ、キリキリ吐けキリキリと」

ソードソウルの太刀の柄部分をレンのホッペにめり込ませる隆矢。その表情は不機嫌さ全開で、レンが「痛！？ちょ、地味に痛い！？」と言っても手を緩めるところか更に強めている所から、不機嫌さが窺い知れる。

「えつとですね。自分の所にも白のスカウトが来たんですよ」

「ほうほう。それで？」

「それで、高町隆矢って人が協力するかも知れないからと言われて、一度会ってみようかと……」

「……で？」

隆矢はめり込ませるのを止め、レンの言葉を待った。

レンもいい加減真面目になったのか、真剣そうに口を開く。

「だから、会ってみてそれだけじゃどんな人間かハッキリしなかったから戦って確かめようと……」

「……もう少し穏便な方法は無かったのかよ……」

隆矢は深いため息を地面に向かって吐く。

確かに、どんな人間か見定める方法の一つに戦いという方法があるのは認める。認めるが、他の方法は取れなかったのか。

「いや、時間も無いし。これが一番手っ取り早かったから」

「そうかい」

手っ取り早かったからじゃねえだろオイ。と内心で隆矢は思いつき

りツツコミを入れる。

一通り聞き終えてから、最後に、

「……んで？俺をどう思ったんだ」

屈んでいた姿勢から立ち姿勢になり、隆矢は座ったままのレンに尋ねる。

レンは百キロの重りをよいしょ、と太ももから下ろしてしっかりと立ち上がる。

そして隆矢の目を下から見てニパツ、と笑った。

「アンタとなら、戦ってもいいな」

「そりゃ、ありがとう」

隆矢も、同じように笑った。

紅瞳の少年を仲間にし、主人公たる彼は進み続ける。  
この、嘘から始まった現実の世界を。

## 第五話 赤目の少年と隆矢の答え（後書き）

小学校の頃の自己紹介文をもつと真面目に書けばよかったと思うこの頃……

ちなみに自分は本当に殴り合いから始まった友達が居たり。半年後には何故か一緒にゲームしてたという（笑）

## Sword 説明集（前書き）

これはこの話の説明集です。

後々追加されて行きます。

意見があつたらビシバシ言っちゃって下さい。

## Sword 説明集

### Sword 説明集

魔導士陣紹介。

高町 隆矢 りゅうや

容姿 黒目黒髪

年 十四歳

魔導士ランク 不明だが、陸戦の方が高い

デバイス ソードソウル

ミットチルダ式 カートリッジ無し

魔力光 黒

今作品の主人公。

死ぬ前は日本の高校一年生だった。

現在は高町家の一員であり、なのはの兄となっている。



最初は精神的に荒んでいたが、なのはが生まれた日を境目に彼は変わる。

口調が多少悪く、大雑把で常識が無いところもあるがいい兄貴分。ミッドチルダ式だが接近戦、陸戦での切り結びをもっとも得意とする。

恋愛は興味無し、というより他に色々あるのであまり考えていない。戦い方は射撃魔法などを殆ど使わず、己の剣で戦うことが殆ど。二刀流で、その剣技は天賦の才と長きに渡る努力に支えられている。

ハル・フォーマス

容姿 青髪緑眼

年 八歳

魔導士ランク A A A -

デバイス エアストロ?

ミッドチルダ式 カートリッジ有り

魔力光 蒼色

主人公への親友キャラその一……では無く実は二。話の流れ上、先に出た。

過去に彼を根本から変えてしまう事件があつたようで、彼は昔程笑ったりするなどの感情を見せていない。時々かける伊達眼鏡もその現れである。

ちなみに優秀なマイスター（デバイスを作ったり直したりする人）でもある。

性格は冷静で、口数はそこまで少なく無いがどこか時折感情を消す。ミッドチルダ式の中・遠距離タイプ。弓や銃などの形態の飛び道具を使う。

恋愛はさっぱりである。まだまだアリサとも友人以上恋人未満の関係。

戦い方は空戦が得意で、誘導弾、直射弾、炸裂弾、貫通弾。ありとあらゆる射撃、砲撃魔法を使って敵を倒す。

レオ・レイヴェルト

容姿 黒髪黒目

年 十六歳

魔導士ランク A A A +

デバイス アルティメット

近代ベルカ式 カートリッジ有り

魔力光 薄い青

オリキャラの一人。

本来、立場的に味方の筈なのだが何故か敵になっている。

ちなみに転生者では無く、両親は既に他界している。

性格は優しく、ユーリ達のストッパー兼ツッコミ役だった。だが敵にまわってから殆ど笑わなくなっている。

近代ベルカ式というが、正確には近接戦ではベルカ式を、補助遠距離の魔法はミットチルダ式の魔法を使う。かなり特殊だが、それを使いこなせていることからレオの実力の程が伺える。

確実にリタのことが好きだが、何故かその気持ちにある人物以外にばらしていない。しかもその気持ちに封をしているようだ。

戦い方はミットチルダ式による遠距離の攻撃、身体強化、回復など。ベルカ式による近接魔法を駆使したオールラウンダーの前衛寄り。ガンブレードという特殊な奇形の剣を使う。

アスカ・ウェスペリア

容姿 オレンジの髪蒼眼

年 十四歳

魔導士ランク A A A -

デバイス エクソルキザンス（エクソルと普段は呼ぶ）

ベルカ式 カートリッジ無し

魔力光 オレンジ

レアスキル・魔力変換

オリキャラであり、一応今作品のヒロイン？になる予定。

転生者だが、実は原作知識という物が全く無かった。

そのせいで過去に色々有ったのだが、それを信頼した人間にしか喋っていない。

性格は大雑把。だが仕事などは意外とマメな部分が多い。そしてツンデレが多かったり。

ベルカ式なのは、隊長であるフォンの影響もあると思われるが、一番の要因はレアスキルだろう。

恋愛は興味が無かったようだが、隆矢のことを時が経つにつれ徐々に意識し始める。

戦い方とはかく近接戦闘。前衛。大剣でぶった斬る。

中・遠距離魔法を二つしか持っていない。これはアスカのレアスキルが特殊過ぎるせいである。詳しくは下の項目で。

リタ・モルディオ

容姿 茶髪緑眼

年 十五歳

魔導士ランク S -

デバイス アスピオン

ミッドチルダ式 カートリッジ無し

魔力光 金色（少し薄い感じがある）

かの作品から参加して貰ったキャラの一人目。

転生者では無く、とある事情からユーリ達と一緒にギルドに所属している。

両親に関する過去の話はユーリ達にすら殆ど話しておらず、レオにのみ、ほぼ全てを話している。

性格はクーデレとツンデレが入り混じったような感じで、よくツツコミを入れている。年相応の少女のような部分も、大人顔負けの冷静な部分もあり、大人になりきれない子供と言った所。

ミッドチルダ式の使い手であり、逆に魔法の有名な開発者。天才魔導少女と呼ばれている。

恋愛感情は本人自身、まだハッキリ自覚していない。だが、レオのことになると物凄く年相応になり、周りはよくそれに苦笑している。戦い方は遠距離からの圧倒的な魔法の連発。魔力もかなりあるため、リタはこの戦法をよく取る。ただしその分接近戦が余り凄く無く、相手がベルカ式でかなりの使い手だった場合、ランクが格下でもかなり手こずっている。

あかみやれん  
紅宮連

容姿 黒髪紅瞳

年 八歳

魔導士ランクA A A -

デバイス フレンベルグ

近代ベルカ式 カートリッジ有り

魔力光 紅色

魔力変換資質・炎

オリキャラの中で一番早く作られたキャラ。

転生者で家族も一人を除きちゃんという。その一人がレンの人格に大きく関わっているのだが……

いつも笑顔で優しく強い芯を持つが、それは一部の人には分かる偽りのものだった。

よくバカやってハルやアリサに説教などをされている。

趣味は様々で運動も読書も大好き。

近代ベルカ式で、ナツクルによる肉弾戦を好む。魔力変換資質もあり、かなりの実力。

恋愛感情は不明。ただし、すずかには相当好かれている模様。

戦い方は勿論、近接戦闘。射撃など全くといっていいほど使わない。

戦いのセンスはこの物語に登場するキャラの中で一番あり、勘も鋭い。

フォース・ラインベル

容姿 銀髪金眼

年 二十代？

魔導士ランク S -

デバイス ホワイト

ベルカ式 カートリッジ有り

魔力光 白

白の団を統括する女性。

過去は謎に包まれており、何歳なのかも分からない。

家族なども不明だが、彼女にとっては白の団自体が家族のような物らしい。

性格はもの静かで、リーダーとしての気品を感じさせている。ベルカ式の使い手で、相当の実力を持っている模様。

恋愛は不明。

戦い方は余り知られて無いが、恐らくベルカ式らしく接近戦が得意だと思われる。

## オリジナル魔法

「Aerial? Shot」エリアルシュート 使用者・転生者A

本作で最初に使われた魔法。

初級の射撃魔法で、威力は其処まで無いが、殺傷設定だったため極めて危険な魔法になっていた。

初登場 第一話

「Saver? Rain」セイバーレイン 使用者・転生者A

広範囲殲滅魔法。

大量の魔力刃を己の周囲に形成、相手に向かって降り注がせる。

その威力もさることながら、殺傷設定だったため、もはや殺人兵器だった。

だが、使用者自身の実力が低かったため、魔力任せの強引なものに、そのためデバイスに多大な負荷がかかり、暫く魔法を放つことが出来なくなっていた。

初登場 第一話

「転送攻撃」てんそうこうげき 使用者・転生者A

転送魔法と射撃魔法を組み合わせた魔法。旅の扉に似ているが、こちらは魔力弾自体に転送魔法を使って相手の所に飛ばす。

そのため、術者によっては砲撃魔法すらも転送することが出来る。難易度が高く、転生者Aはデバイスの補助があっても魔力弾一つが限界だった。

初登場 第一話

「Auto Protection」オートプロテクション 使用者・高町隆矢

隆矢が最初に使った、というよりはソードソウルが彼の魔力を使って自動で展開した魔法。

ソードソウルに備え付けられたAIによる自動術者補助機能の一つであり、かなりの魔力を必要として耐久度もそう高く無いが、緊急時の防壁としてはかなり使える。

初登場 第一話

「魔力凝縮」まじりよくちやく 使用者・高町隆矢

厳密に言えば魔法では無いが、魔力を使用するためここに記載する。魔法というのは魔力を術式を通して発動する物。だがこれは魔力をそのまま圧縮し、魔法的ダメージを与えられるようにしたある意味魔力の無駄使い。

隆矢の魔力がかなりあったのと、凝縮、収束する力が高かったため、相当の威力が出た。

## 初登場 第二話

「黒刀召還」こくとうしょうかん 使用者・高町隆矢

魔力によって構成された剣を呼び出すための魔法。

隆矢は太刀の二刀流であり、ソードソウルは一つしか太刀が無いためこの魔法で二刀流になる。

かなり簡単な術式で、魔力を凝縮するというのが得意な隆矢には気楽に使える魔法である。

## 初登場 第三話

「振動斬」ちんどうざん 使用者・レオ・レイヴェルト

レオの扱うガンブレード特有の機能。

魔力が凝縮されたりボルバーの弾倉が、トリガーを引くことにより炸裂して膨大な振動を生み出し、刀身を震わせる。

剣の打ち合い、障壁破壊などありとあらゆる場面で絶大な力を誇る斬撃である。

威力は大剣での一撃をも超える。

## 初登場 第三話

「Triple Shot」トリプルショット 使用者・レオ・レイヴェルト

デバイスの周囲に三つの光弾を出現させ、相手に飛ばす射撃魔法。直射弾というよりは細いレーザーに近い。着弾と同時に炸裂する。

## 初登場 第三話

「Ivey Rush」アイヴィーラッシュ 使用者・リタ・モルディオ  
攻勢バインド。鋼の軛くびきに近い。

大地、もしくは空中に展開した魔法陣から魔力によるトゲ付きの蔦を出現させ、相手を絡みとるか、もしくは貫いて捕縛する。拘束力よりもダメージによる痛みで解除させないように作られている。



## 初登場 第三話

「Frame dragon」フレームドラゴン 使用者・リタ・モルディオ

竜の姿をしたリタ特製の誘導型砲撃魔法。

砲撃としてのスピードを犠牲にすることにより、直角に曲げれる程の誘導性と、かなりの炸裂能力を持つ。

リタは最初、レオとの距離がそんなに離れて無いため、溜め無しでこれを放っている。

## 初登場 第三話

「Himmel Fl?gel」ヒメイルフルゲル 使用者・紅宮連

ドイツ語で「空翼」という意味。

レン専用近代ベルカ式魔法で、足の裏に特殊な力場を形成。空気を蹴って移動することが出来るようになる。

発動時はブーツの踵から二枚の羽が展開される。

## 初登場 第五話

「Riese Faust」リエセファスト 使用者・紅宮連

近代ベルカ式魔法。ドイツ語で「巨人の拳」。

右手に魔力を凝縮、殴って炸裂とシンプルだがその分安定した威力を持つ。

更にレンの場合、ナックルの加速機能と魔力変換資質により高い威力を持つ。

## 初登場 第五話

「物質操作」ぶつしつそさ 使用者・高町隆矢

極々簡単な、物質操作の魔法。

魔法を学ぶ者なら誰しもが使える魔法でもある。

しかも隆矢が操作したのはデバイスなため、距離があってもかなりのスピードで動かせた。

## 初登場 第五話

「しんそくいつせん神速一閃」使用者・高町隆矢

隆矢がレオの動きを見て負けじと習得した高速機動魔法。

溜めが少しある、距離の細かい指定が出来ない、ほぼ直線移動のみという弱点も多いがその速度は正に神速。

通り過ぎる際に切り裂いたり、高速接近などかなり使える魔法である。

## 初登場 第五話

## デバイス紹介

『ソードソウル』持ち主・高町隆矢

高町隆矢の相棒。本来、ハルの試作品デバイスだったがソードソウルが勝手に隆矢をマスター登録したため隆矢の物になった（ちなみに出世払い）。

ストレージデバイスだが、術者をフォローするため簡単なAIが搭載されている。

何故かアームドデバイス並の頑丈さを誇り、ミッドチルダ式の隆矢が遠慮無く接近戦が出来る。

バリアジャケットは黒のコートに所々白い鋼の装飾や防具が付いている。武器は一本の太刀。

カートリッジは無し、モードも少ない。

『Standby Mode』  
スタンバイモード

普段の姿。待機状態。黒いダイヤが嵌め込まれた剣を象ったペンダントである。

この状態でも魔法は使え、ソードソウルの術者補助機能も発動する。

『Device Mode』  
デバイスモード

一本の機械仕掛けの太刀を出現させる。鰐に当たる部分に黒いダイヤが。

どの性能に特化している訳でも無く、敢えていうなら形状的に近接戦闘に特化している。

『エアストロ』 持ち主・ハル・フォーマス

ハル自作のインテリジェントデバイス。普段はカードにして胸ポケットの中に入れている。

モードは意外と多い。理由としては中々遠距離の戦闘だけでなく、様々な局面に対応するため。

ハルのために（というよりハルが作った）作られた物のため、ハルとの相性は抜群である。ミッドチルダ式の中々遠距離に特化している。

バリアジャケットは長袖の黒いコートに黒いズボン。コートは結構長めに形成されている。

武器は弓。だがモードをこころろ変えるため、一概には言い切れない。

カートリッジは六個。砲撃の上乗せによく使う。

『Standby Mode』  
スタンバイモード

銀色のカード。

普段は喋らず、胸ポケットにいる。

『Arrow Mode』アローモード

最初の体型。主に射撃魔法に使われる。全長一メートル程の機械じかけの弓。弓の本体にちゃんと薬莢が出る部分がある。

『アルティメット』 持ち主・レオ・レイヴェルト

レオが使う、この世に一つしかない特別なデバイス。とある経緯でレオに渡った。最初は壊れた状態だったのだが、リタとの共同作業により復元。つまりレオとリタの愛の結晶（よくこう言われてからかわれる）。

ガンブレードという誰が考えたか分からない奇形の剣であり、完璧に扱えば絶大な力を誇る。

分類はアームデバイス。

バリアジャケットは黒を中心にした服装で、所々に獅子飾りが付いている。

カートリッジシステムも付いており、最大六発のマガジン式である（リボルバーはガンブレードの特殊な魔法のため）。

『Standby Form』スタンバイフォーム

普段は指輪の形で左手の人差し指に挟まっている。色は銀色と黒。

『Cancerbraid? Form』ガンブレードフォーム

ガンブレードを呼び出すモード。これだけでレオは近中遠距離戦闘の全てを完璧にこなす。

ガンブレードの刀身は八十は有り、かなり大きい。

『エクソルキザンス』持ち主・アスカ・ウェスperia

アスカ専用、というよりアスカが持つレアスキルのために調整が施されたベルカ式アームデバイス。

バリバリ前衛のアスカはこのデバイスによる大剣を使って戦う。

普段はペンダントになっている。

モードは少なく、単純なアスカには此方の方がいいらしい。

騎士甲冑は布が多い鎧。左肩のガントレットが特徴。

カートリッジシステムも勿論有り、最大装弾数は七つ。

スタンバタイフォーム

『Standard by form』

普段の状態。オレンジ色の剣型ペンダントで、首からかけている。

ブレードフォーム

『Braided form』

巨大な片刃の大剣を生み出す。

アスカの身長よりも大きく、重量も相当なもの。

カートリッジを吐き出すための排気ダクトが大剣の背に付いている。

装飾も特に無く、無骨で恐ろしい武器。

『アスピオン』持ち主・リタ・モルディオ

帯型の魔法を補助する機構が高いデバイス。

銃型や杖型のように魔力の収束を助けてはくれないが、代わりに術式の展開速度や効率をアップしてくれる。

バリアジャケットは左右非対称の不思議な服装。

戦闘中は帯型で、普段は何故か本の形。

カトリッジは無し。

『Standby Mode』スタンバイモード

辞典並みの厚さがある本になっていて、よくリタはツッコミにこれを使う。デバイスでぶっ叩いていいのかという質問は無しで。

普段は腰のホルスターにはめている。

『Scroll? Mode』スクロールモード

長さ不明の緑色の帯が出現する。

帯の表面は魔法の術式で埋まっており、これを操ることで大魔法を連発することが出来る。

『フレンベルグ』 持ち主・紅宮連

レンが誕生日に貰った近代ベルカ式のアームデバイス。

見た目は指輪で、紅い色と黒い色が混じったような感じ。右手につけている。

モードは少ない。近代ベルカ式というのもあるし、接近戦以外を殆どしないため。

バリアジャケットは前を開けた半袖コートに、シャツ、ジーンズ、ブーツといった日頃の服装にしてもおかしくない物。

武器は肘まで届く手甲付きのナックル。空戦でナックルというのは珍しいが、レン独自の魔法がソレの短所を劇的に減らしている。カトリッジは片方に六個。合計十二個入っている。

『Standby form』スタンバイフォーム

見た目は特に装飾の無い指輪。

普段は右手の中指に付けている。

『ナックルフォーム  
Knuckleform』

普段はこれだけしか使わない。スバルと同じように右手左手に機械のナックルを生み出す。

レンの魔力変換資質のことも考えて作られており、一発一発のためた拳の破壊力は砲撃魔法レベル。簡単な射撃魔法ならこの状態でも使える。

その他（レアスキル、意味不明の単語など）

「白の団・黒の団」

転生者や一般の実力者から構成されたギルド。

管理局からかなり目をつけられている（実力者ばかりなため）。

白の団は質が良く、黒の団はとにかく数が多い。

主義も全く違い、組織間の仲は悪い。

普段は管理局にはいかないうような仕事や依頼をしている。

「レアスキル・魔力変換」

魔力変換資質では無く、全く別の力。

相手から放たれた魔力を自分へと変換。吸収することが出来る。

但し、相手からじかに魔力を吸い取ったり、空気中の魔力は変換出来ない。

後無意識のうちに発動しないように気よつけている。何故なら、自分の魔法や、転送魔法まで掻き消してしまう可能性があるから。

だが、それを先引いても射撃、砲撃魔法使いにはとても効果的なレアスキルである。

「魔力変換資質・炎」

魔力を自然の現象である炎に変える力。

魔力を電気や氷などに変えるのは術式と力があれば可能だ。

だが、レンの場合そういったプロセスを踏まずに魔力をそのまま炎に変えることが出来る。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1481m/>

---

魔法戦記リリカルなのは Sword

2010年11月5日06時14分発行